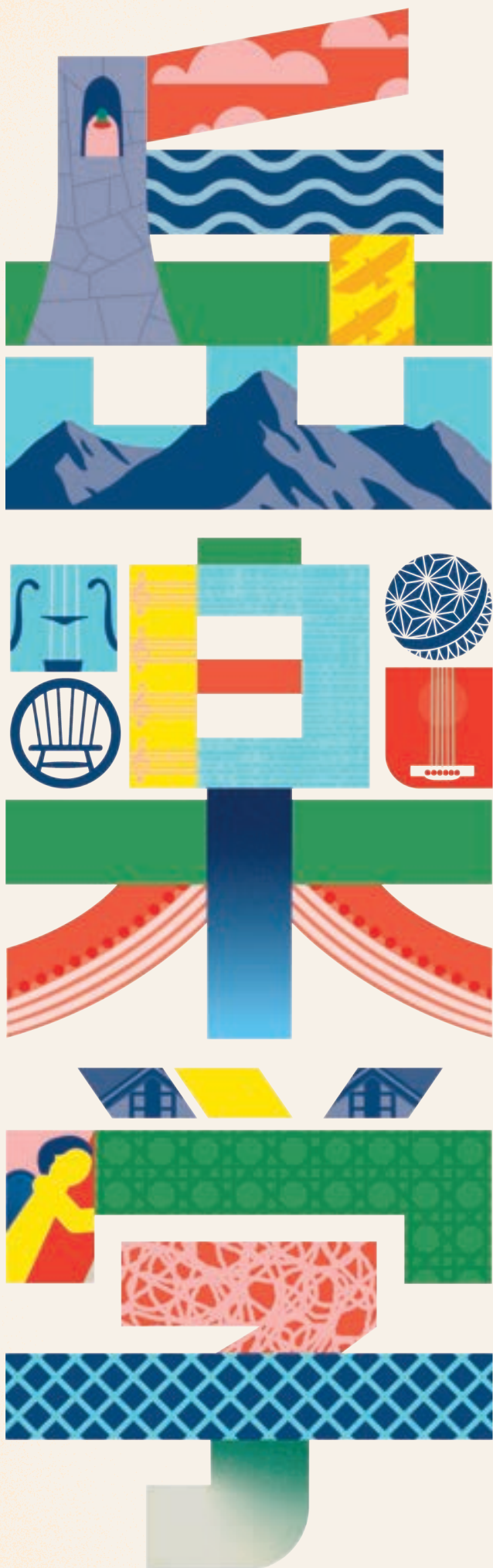


松^ま本^と本^ぼ。

豊かさ
と
幸せに
挑み
続ける
三
ガ
ク
都



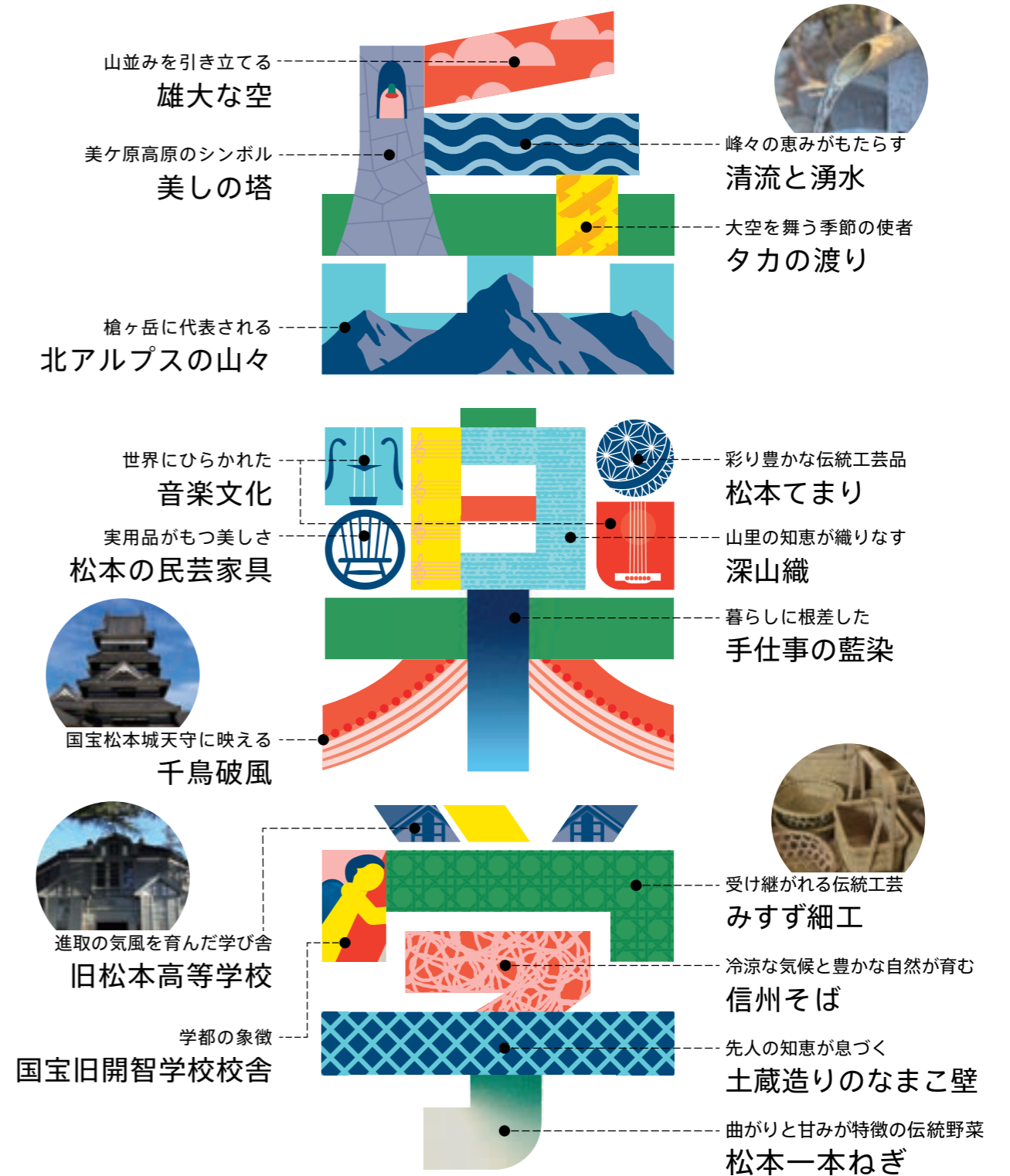
豊かさと幸せに挑み続ける 三ガク都

「岳」「楽」「学」。

三つの「ガク」は、自然、歴史、文化、学びなど、
多様で質の高い要素が、幾重にも重なり合う松本の姿を象徴しています。

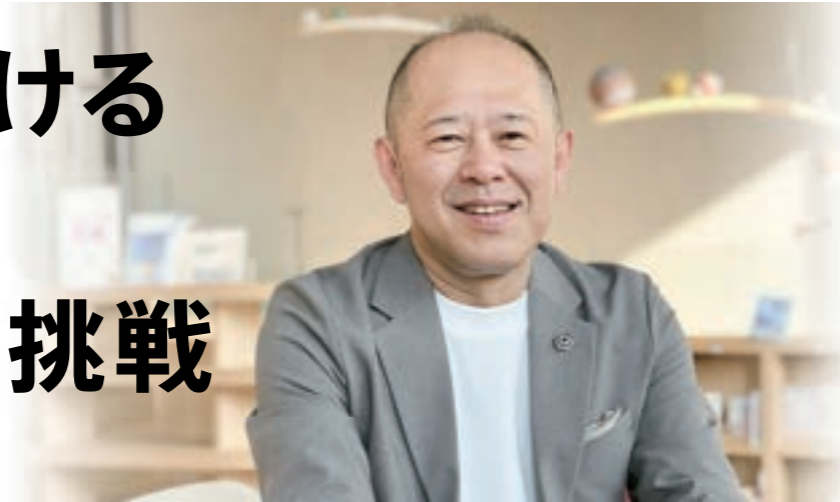
ここに描かれているのは、その一部。

松本には、ほかにもたくさんの魅力があります。



シンカを続ける 「三ガク都」 松本からの挑戦

松本市長 臥雲 義尚



松本らしさとは、何だと思えますか。

私は、このまちを“日本の縮図”と捉えています。

駅と城をつなぐ中心市街地があり、近郊に住宅地が広がり、その周りに田園や里山、森林、そして北アルプスの山岳地帯が連なる、同心円的な都市構造を有しています。それぞれの地域には、地形や歴史に根差した多様な文化が息づき、産業も多岐に渡っています。

日本全体の特徴や魅力が凝縮された、「ちょうどよく、何でもある」まち。それが、松本市です。そして、この松本らしさを象徴するものが、「三ガク都」です。

「岳都」「楽都」「学都」。

いずれも、長い年月をかけて培われてきた、一級の価値であり、今なおシンカを続ける、市民の誇りです。

「三ガク都」は、単に“そこにある特徴”ではありません。市民一人ひとりの営みや活動そのものだと、私は考えています。

たとえば、3,000m級の北アルプスの山々は、人々が訪れ、体験し、楽しむことで、その価値を高めてきました。



この関係性は、文化、産業、学びなど、松本の日常のあらゆる場面で垣間見られます。「三ガク都」と市民の営みが重なり合うことで、松本らしい多面的な魅力が生み出されてきたのです。

こうした広がりを“水平方向”の魅力とするならば、“垂直方向”の魅力とも言えるのが、「伝統と革新の共存」です。

先人から受け継がれてきた伝統や文化が、現代を生きる人たちの感性や表現と結びつき、新たな価値をまもっています。市民の手で守られてきた松本城天守が、先端的な技術によって異なる表情を見せ、大勢の人を惹きつけている姿は、その一つです。

いま日本社会は、デフレからインフレへ、大きな転換期を迎えています。同時に、東京一極集中という偏在の是正は、日本全体で向き合うべき最重要課題です。

地方都市が持続可能であり続けるためには、それぞれの地域が持つ特性を活かし、自立した基盤と循環を作り出していくことが欠かせません。松本市にとって、その大きな強みこそが「三ガク都」であり、このまちが新しさを希求する力を、私は誰よりも信じています。

第12次基本計画は、2030年に向けた松本市のまちづくりの指針です。総合計画で掲げた「一人ひとりが豊かさと幸せを実感できるまち」の実現に向け、市民の皆さんとともに、「三ガク都」のシンカに挑み続けていきます。